戦争法案反対の国会前抗議行動の最前線で4カ月にわたり声を上げ続けたＳＥＡＬＤｓ（シールズ＝自由と民主主義のための学生緊急行動）。中心メンバーの一人となってデモ進行の管理を担当し、雨と、どこまでも続く人ごみの間を小柄な体で走り回って、連日のデモを支えた女性がいます。大学４年生の芝田万奈（まな）さん(22)です。コールでかすれた声で話したその思いは―。（土田千恵）

シールズの行動を支えた
芝田万奈さんの思い

（シールズ提供）

民主主義 仲間とつくる

「採決された瞬間、すごく怒りがわきました。でもすぐポジティブになったんです」

戦争法成立の瞬間（19日、午前2時18分）、万奈さんは先頭で、他のメンバーとともにスマートフォンでテレビ中継を見ていました。〝採決〟という言葉と、それに抵抗する野党の怒号。そんななかで感じたことは「こんなにあっさり、通ってしまったのか。本当におかしい。なんなんだろう」という憤りでした。

切り替えハヤツ

「安倍はやめろ」「採決撤回」。仲間とともに再び国会をにらみつけ、怒りで胸をむかつかせながら、険しい顔でコールしました。不思議なことに、夜明けまでにその表情はだんだん和らぎ、笑顔が戻りました。

「だってみんなポジティブすぎるんですもん。もう次どうするかのスピーチをしてるんですよ。『切り替えはやっ！』って心の中でつっこみました」。楽しそうに話します。

「法案は通ってしまった。でも反対行動のプロセスの中で市民も政治も変わった。そしてここに、民主主義をこれからずっと一緒に考え、つくっていける仲間がいる。そう思ったら、怒りが消えてポジティブな気持ちになりました」

万奈さんが初めて社会問題に関心を持ったのは高校3年生の春。東日本大震災で被災した親戚や、原発事故の情報が錯綜（さくそう）し苦しむ母親たちを見て、「東北のためにできることはないか」と考えたのが最初でした。

他県に避難した母親たちへの聞き取り、ボランティア、ＮＧＯによる東北の青年の支援…。持ち前の「納得できないことは突き詰める」という性格もあり、アメリカの大学から途中で日本の大学に編入までして、活動に打ち込みました。

行動する一方、日々生活に苦労している多くの人たちがいることに気づき、何もできない「自分への無力感」を感じていました。それに対してしっかり対策をとらない「社会への絶望感」も常にのしかかっていました。これでは社会は根本的には変わらない―。「ずっと社会や政治に絶望していた」といいます。

2014年の秋、大学3年生のとき、秘密保護法に反対する学生たちのグループ「ＳＡＳＰＬ（サスプル＝特定秘密保護法に反対する学生有志の会）」に出会いました。「他に同世代で声を上げている人も少ないしな」。最初は軽い気持ちで仲間になり、沖縄・米軍辺野古新基地建設の座り込みへの協力、デモや集会の開催などに加わっていきました。

ずっと主権者だ

いま、万奈さんの絶望に光がさし始めています。

「原発については官邸前の金曜日行動のおかげで原発稼働ゼロが長期に続いた。だからデモって意味があることだと思うようになったんです。今回も、万単位の人びとが戦争法案に怒っている事実を実感させたことで、多くの政治家を本気にさせたと感じています。自分が行動すれば、社会は少しずつよくなる。仲間もいる。決して楽観的なわけではないけど、絶望している暇があるなら、やれることをやろうと思える」

今後もデモを企画したり、国政選挙に向けた準備をしていく予定です。

「法案が通って〝残念だね〟ではなくて、『おかしいことだし、ほんとに戦争になるよ、だめだよ』ということを広げるしかない」

視線は前に向いています。

「国政選挙が終わっても次がある。私たちはずっと主権者だから、日常のなかで、これからもこの国、社会を考えないといけない。そして私は、社会に心地悪さを感じたらほっておくんじゃなくて、向き合って生きていきたい。これからも行動し続けます」